

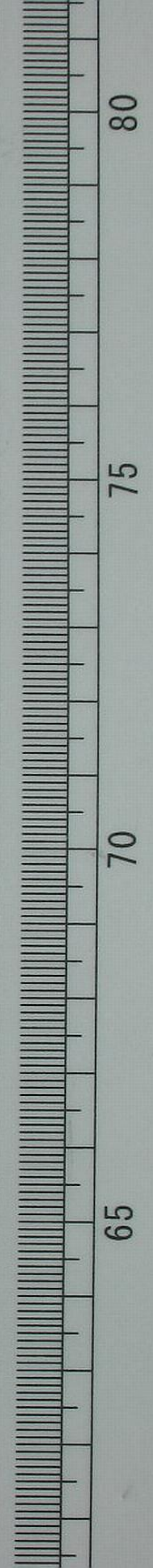


通俗

渡邊義方編輯
日本小史

第二編

上



80

75

70

65

A557
3

染崎延房檢閲
渡邊文京探觚

梅堂國政畫

通 俗
日本小史

東京書肆 金松堂發兌

文事開く御代よりつての牛打つ稚童草薙る少女も
 皇国の治乱興廢を知らず虚しく過べきあるを素より夫等と編成
 せし物大日本史と始めとして世よりの乏しくと雖も高上るるの
 目も觸るべく耳も聞とも解易く自然るを渡邊文京子ら疾くも
 爰より着目さきとん這回日本小史と題せし小冊二巻を編しし天慶
 以降の事歴みし専ら簡易に綴るのより傍訓を添え挿画を加
 へて讀み輒く見る小倦れ世評最も高く一為し書肆の利を得る
 由今續輯を發する及び予み檢閲をせよとあり老眼の能くまたさき
 ねど辭を免されざるを聊が巻端に其意を演て四方の看客に謝
 せし事なるを

染崎延房誌



景時景親
 我欺もたて
 頼朝が窮
 厄と救ふ

梶原景時

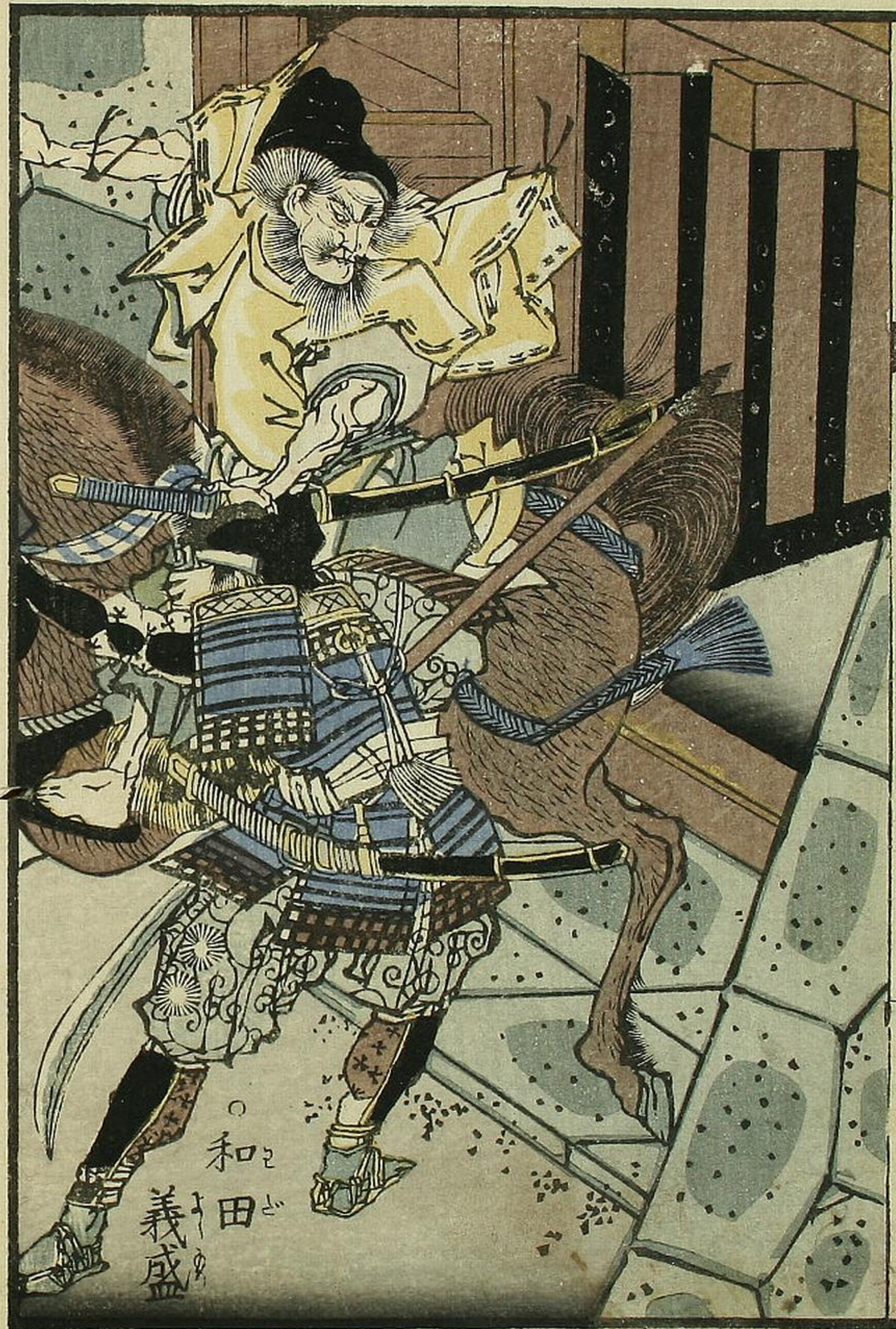
大庭景親

日本書紀
 二編二



源頼朝
 土肥実平

日本書紀
 二編二



上の巻

承安四年牛若鞍馬と出て陸奥より秀衡が許
小倚る小起り治承四年安徳帝位ふ就き平氏
外祖を以て益々専横する源三位
頼政が以仁王を勸めて大義を奉る小終る

下の巻

伊豆の流人源頼朝以仁王の令旨を得て
石橋山の戦ひ敗る頼朝より起り諸国乃
源氏蜂起して平氏より迫るよう養和元年
平清盛薨去するの件より畢る

通俗 日本小史二編之上

深崎延房檢閲

東京 渡邊文京操觚

去程より牛若丸の思ふに違ふは天下の豪傑かの辨慶
と君臣の契約を結ひ千里の馬も伯樂も値遇まると
不思議の喜悅別れて鞍馬より歸りて後猶つくと
思ふやうきも時めく清盛と亡び父祖の耻辱と
雪むるに實に容易の事よあらむ大族名家の庇蔭よ
依らば如何でり大事を成得べき今天下の形勢を察
するに我羽翼よあるべきものに陸奥の國守鎮守府

將軍藤原の清衡の孫秀衡よりあつて誰かあつらん
彼へ大祖父八幡公より抜擢され源家より因縁も浅く
を往て我意衷を打明け語らむるは合體同志諸共
死刀を盡して承諾と云ふ言へ東國の邊陲より
て此處と彼處と道の程隔たる事を奈何もせん往
返るも易くぬ胸の焦立つ慷慨悲歎便りもが
と思ふ折柄この山寺へ請で来る鐵賣吉次と云ふ
者あり年々東國へ下向して商用の爲旅々旅へと
陸奥の國へも往來すると聞き情を告て依頼しお吉次

も思ふ仔細や有らん最快よく承諾て牛若と伴あひ
鞍馬と脱出で下總と経て漸次東路さして下る途
中下野の豪士伊勢三郎義盛ある者と得たり乱離の
世の慣習とて弱きへ強きを制せしと政令普く全国
に届りて平氏の驕奢と心に憎と朝野に不平を抱く
の英傑時機を得ざるを怨み啣つ池中の蛟龍たるは
しものるを義盛もそが一人よしく牛若丸の相貌と熟
視し共事と成べしと思慮頗る定まりしうは爰も
同志の誠を表し犬馬の勞とも厭と契ひ此君より

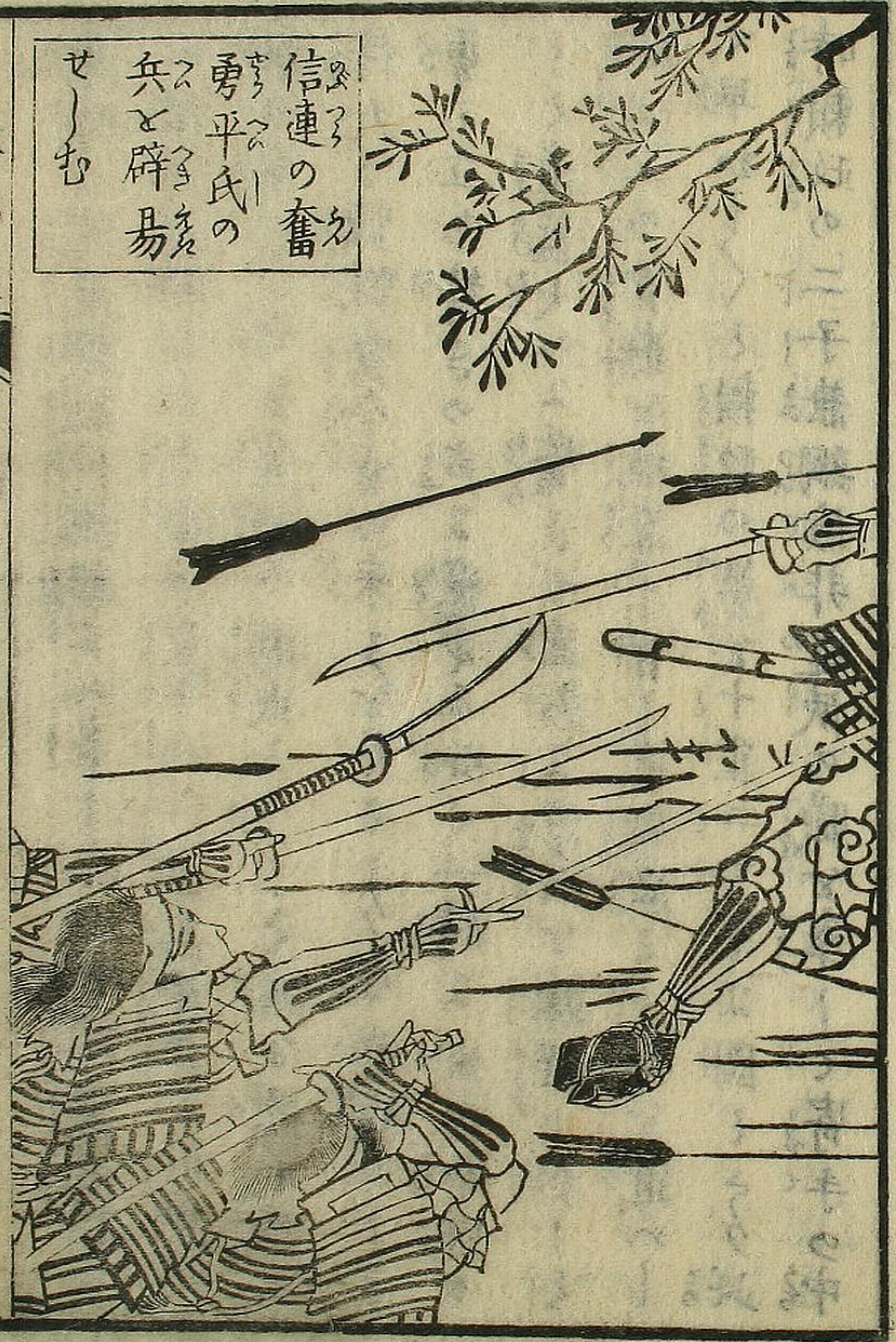
此臣なり此ぞ後義経が四天王の隨一たる兆徴と
 爰に現出たり夫より三人道成急ぎ日ありを陸奥に
 着せしう秀衡に依て意衰と明し只管助けを乞ふ
 と聞き案違ひを秀衡に厚く牛若主従と勞り暫く
 當所滞留して時機の來ると待たし人と慰め勵ま
 せ勇士の膽畧昔と合し忍をれて口よ言ねと懷舊の
 歡きも左とて又天が心の中を頼母にたれ是に於て
 牛若へ自り元服して冠を加へ名と改めく義経と
 曰ひ九郎と稱を素より大志ある事なれば恩威を以

て人を懐け晝夜兵書と眼と晒し六韜三畧孫吳の兵
 法胸に置んて心は解得し嘗て怠たる気色も見え
 志気ある輩へ我もくと義経の威風を慕ひて帰服さ
 し來り属まるそが中し佐藤嗣信同く忠信何れ劣ら
 ぬ英雄豪傑兄弟もろとも義経よ心と傾ぶけ事へけ
 る此も是高倉天皇の御宇承安四年の事ありき清盛
 まなく暴威を逞しく驕奢至らざるも是時當
 つる陸奥出羽を除くの外他も皆平氏の所轄し属し
 源氏に有ども無が如く就中京師の俚諺は平氏の人

よ非ぞれを人よー人よ何れを彼も人非人なりと
 嘲り言ふる傍若無人の拳動を見るよ付け聞よつけ
 曩つ年平治の乱よ獨り方向と異よして順逆の道誤
 まよび意と決して平氏よ属し清盛と俱よ官軍よ加
 たり國家の為よ親族の交誼と捨たる兵庫頭頼政も
 居常憤々樂しむるを平氏と誅戮し君側の惡
 と除くんと思ふものゝ衆寡敵せを怨も成吞て待
 程よ頼政の子仲綱が秘藏の逸物無雙の名馬のりけ
 る成宗盛強て借たるまゝ催促されども嘗て返さず

何れ時大りの客張招ぎ酒宴央よかの名馬と庭面よ
 引出し額髪よ烙印の仲綱の二字と押交りくよ乗
 廻らし仲綱よ乗り仲綱よ鞭ち走らるるり箇は是
 酒宴の好下物も愉快よ候らるるやと言へを一同
 口を揃へ是も面白くくと大穀揚て笑ひ動揺め飽
 まる人張嘲弄るを宗盛の傲慢とを心憎れ公私の
 怨も今のや忍ぶよ難き玉霰碎るるまをも武士の
 弓矢へ折れても挫けぬ魂魄疾やまの身と犠牲よ国
 賊退治の軍の魁義兵を拳て廢るる源氏と再び奥を

信連の奮
勇平氏の
兵と辟易
せしむ



月本小史
二編

信連の奮
勇平氏の
兵と辟易
せしむ

覚悟の建策頼政仲綱親子の素より一族郎黨忍びく
 又味方と語りひ先帝の皇子以仁王(高倉宮と称す)と
 勸め奉り今を東国の源氏より下りて兵と徴を待た
 待たる慷慨黨令旨の来るを見るよりも雀躍し
 勇立ち響きの声も應る如く一時は世の中騒が
 しく清盛大の驚き直ち軍兵と驅催し奏し
 以仁王の官爵を褫奪し目して朝敵と兵を遣は
 て早むしく頼政の弟と十重二十重と圍とて此
 時頼政の二子兼綱檢非違使の職と奉りて寄手の中

一在りて事の危急は迫る故に親子の情義傍觀を
 る忍びを密に使者を馳りて寄手の計策如々と父頼
 政に内通せしむべ頼政是より便りを得て敵の動靜を
 知る所の如く坐して彼等の寄るを待て謀策あらはし似
 たりと直ちに以仁王の官闕に至り園城寺に落し
 らせ残る隈に準備して王の近臣長谷部信連の殿
 戦死命に其身に第邸に立歸る萬夫不當の長谷部信
 連義膽忠魂嘗て撓まざ後やさくなき一めんと態と
 宮門をちり開きて来とや應と待とも知らず其夜も

既^まに更^{さら}渡^{わた}り 雞^{けい}鳴^な告^つる 朝^あ未^み明^み平^{へい}氏^しの 軍^{ぐん}兵^{へい}百^{ひゃく}人^{にん}餘^{あま}一^{いち}時^{とき}
 一^{いち}動^{どう}と押^お寄^よてちや乱^{らん}入^いなりしゆ以^も仁^に王^{わう}を執^とへんと
 其^{その}處^{ところ}に此^{この}處^{ところ}りと前後^{ぜんご}左^さ右^う罵^{のの}り騒^{さわ}ぎて尋^{たず}ぬれど王^{わう}の
 素^{もと}より目^めに遮^さる敵^{てき}の人^{ひと}影^{かげ}ゆきして寂^{さび}莫^なかるよ平^{へい}
 氏^しの軍^{ぐん}勢^{せい}是^{こゝ}へそも如何^{いか}ふと呆^{あは}れ果^はて早^{はや}くも我^{われ}手^ての
 寄^よるを知^しりて風^{かぜ}を吹^ふつて逃^に失^しし去^さを跡^{あと}を追^お撃^げし
 て逃^にまき遣^やるる捕^とへよと朱^{しゆ}き騒^{さわ}ぎて官^{くわん}門^{もん}を走^はり出^い
 べんとする折^せりて扉^{ひら}の陰^{かげ}より忽^と然^{ぜん}と現^あれ出^いる
 一^{いち}個^{こゝろ}の壯^{ちやう}士^し是^{こゝ}則^{すなは}ち別^{べつ}人^{にん}ありば又^{また}彼^{かの}長^{ちやう}谷^{こく}部^ぶ信^{しん}連^{れん}あり

右^{みぎ}手^てに陣^{ぢん}刀^{とう}を提^ひげし甲^{かぶ}も穿^くち貫^くらる屹^ま然^{ぜん}
 と立^たたる素^す肌^み武^ぶ者^{しや}勇^{ゆう}気^き凜^{りん}々^々四^し方^{はう}振^ひ拂^ひひ天^{てん}地^ちに響^{ひび}く
 大^{おほ}音^{おと}声^{こゑ}平^{へい}淡^{たん}慌^{わう}て何^{いか}処^{ところ}へ行^いや玉^{たま}を疾^{はや}く落^おたすなり我^{われ}
 最^ま前^{ぜん}より汝^{なんぢ}等^らの来^きる候^{まじ}爰^{こゝ}に待^{まち}て久^{ひさ}し殿^{とん}戦^{せん}まして在^あ
 りし如何^{いか}なり鼠^{ねず}の輩^{たぐひ}に我^{われ}主^{しゆ}君^{きん}を渡^{わた}すべし疾^{はや}く立^たり
 且^{かつ}て此^{この}音^{おと}と浄^{じやう}海^{かい}和^わ尚^{しやう}清^{せい}盛^{せい}を指^さてりし言^{ことば}聞^きせよ夫^{おつ}
 とを虎^こ髯^{ぜん}を引^ひんとせを塵^{ちん}殺^{ころ}しし成^{なり}呉^ごん如何^{いか}なりと
 睨^にみしつめ多^{おほ}勢^{せい}に屈^くせぬ不^ふ敵^{てき}の宏^{こう}言^{げん}物^{ぶつ}る言^{ことば}せを彼^{かの}
 奴^{やつ}撃^げ取^とと逸^{えつ}雄^{ゆう}の兵^{へい}士^し十^{じゅう}四^し五^ご人^{にん}獲^と物^{ぶつ}くを撃^げ振^びて群^{ぐん}り

掛るを物ともせま前より進み一人が曹の腦天唐竹
 割返ま太刀風颯の如く飛込来る左右の敵と二刀三
 刀戦ふうち死を必りたる信連が勇氣よりいりて敵一
 得ん首と胴との一刀両断尚懲まま小競ひより燈火
 睨ふ夏虫の命と落ま木の葉武者抗ふ所の嫌ひも
 く豎割布袋突車斬斬た々難た々戦ふ形況飢うる虎
 が群る羊と牙は掛つ駈どく見るくうち十人六
 六の信連一人は斬立ちまきり立足もまどろよるの
 散乱まされど寄手の多勢を頼まよおつ取込て撃ん

とるまみぞ身鐵石より何れを深癢敷ヶ所負うる
 上甚く疲れて信連も今ハ斯よと覚悟を極め滴たる
 鮮血は咽喉を濕る一今一戦と立抗ふ寄手も流石多
 くの味方を撃れて遺憾は堪まや何りらん左右多く
 へ逃もせむ信連焦つき撃振る太刀尖如何をらん
 鏑元よりポツキと折たる透を窺ひ夫搦めよと折重り
 漸やくふりしと擒とる一王の所在を責問ど信連嘗て
 白状せむ平族をどて斯まて我は綫継の耻を與へ
 禮を失ふの甚太一きや勇士の最期ハ斯と有べし

汝等是を龜鑑とせよ言ふた事は是れを以てぞと自らの
 舌を嚙切て潔よく死たると忠勇義膽不拔の英傑感
 ぶるは尚餘りあり賤而も頼政は我邸第は火放ち
 烟は紛じて圍を脱し其子仲綱兼綱等五十餘人を
 従へて以仁王の追踵せんと辛くも園城寺に
 馳着り爰は源氏の旧臣は渡邊競といへる者
 あり事起ると及びて競は一人頼政は従て依然と
 して其邸宅に在り平將軍宗盛急は競を召して言る
 やう汝元来源氏は旧恩あり城外より三三位は從

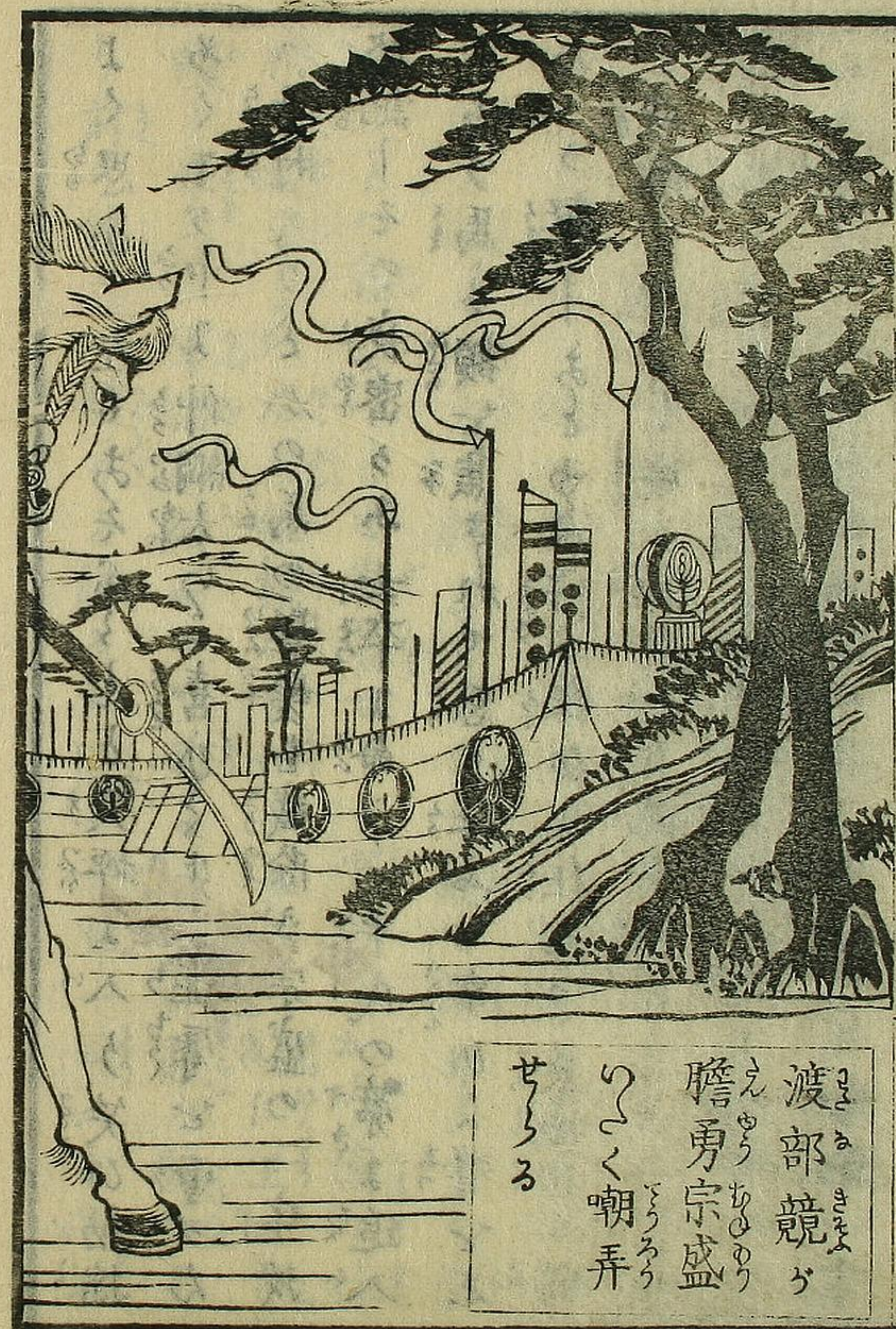
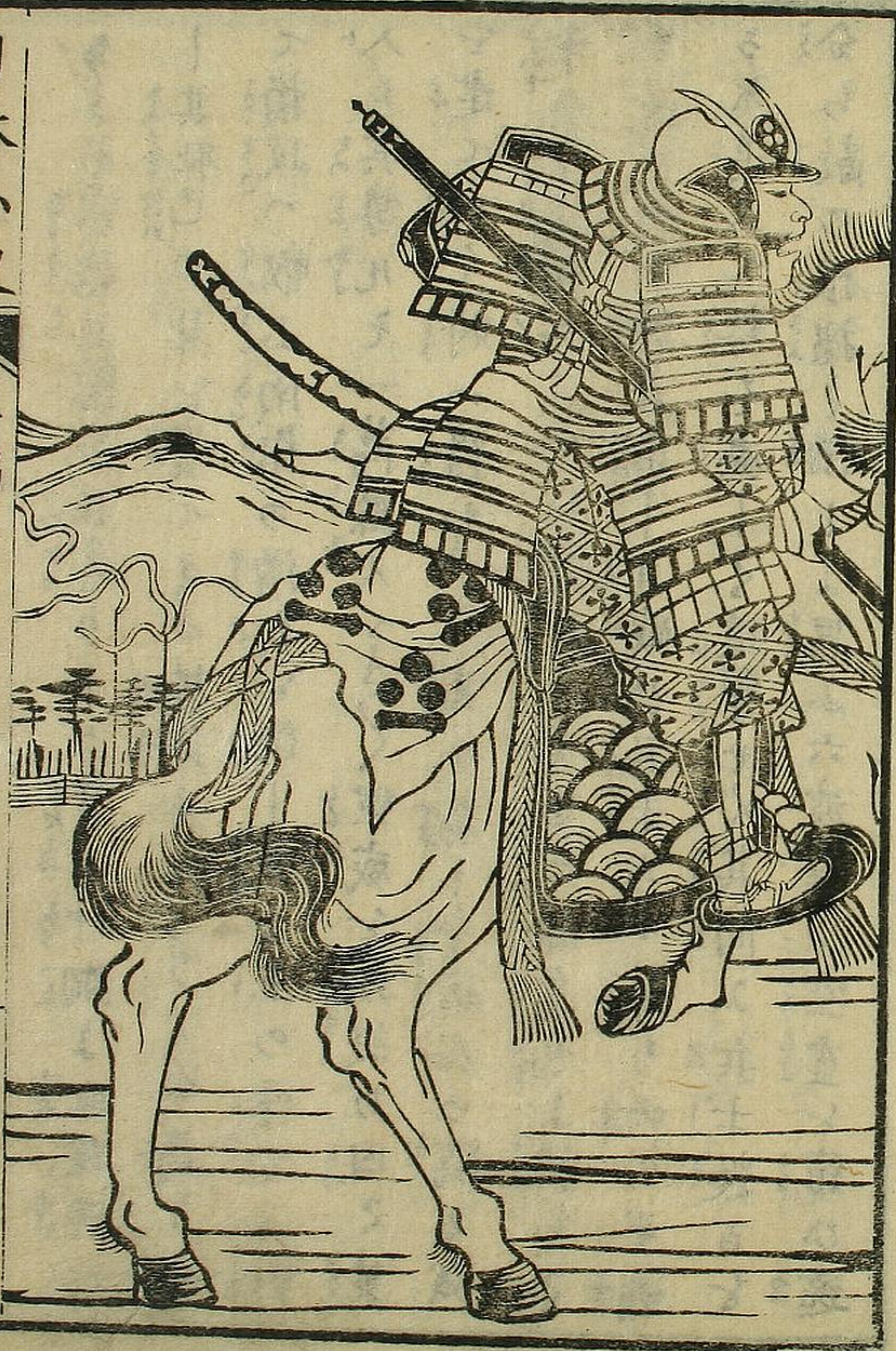
はさるる如何まぢや行んことをば我れも仇を仇
 たり情義は情義強て汝を抑留せざ遣らんと思
 ふなり左へ去なぐ源氏を捨て我れは帰服せんと
 ら重く汝死用ひ上高禄恩賞望しよ任せん汝何と
 決まるやと梓の弓はゆる糸も水向らして浮と
 乗らむ素より思慮ある競が分別誣まると手あしと慙
 慙は額きやくを答ふるやう是は有難き君の仰せ
 近から頼政は怨を懐かむ筋ありと如何多さんと首
 鼠兩端決し兼たる折も折なくも厚き恩命を何条

違背仕つらん此度頼政追討の先鋒と命トなすべ
 寸功と立ち高恩の万分が一報ひんのみ就く一ツの
 願ひなり勇士の功を馬に在るとその馬を死と如何
 せんと言言がましく哀しみ請ふを謀らんとし知
 らせし仕濟しなりと悦ぶ宗盛日おろ愛する駿
 馬を出して當座の賞美と請ふに任せ競ふあり紙與
 へし競へ即ち家へ帰り甲と穿ち胄と戴き出陣の
 準備を整へるかの宗盛を欺たる貫ひ受たる駿馬は
 うち乗り適晴勇々しき稀世の武者振宗盛が邸第の

門前に至り如何に平族よつと聞け渡邊競へ源家の
 旧臣利慾の為は誘われ義は背きそ方向を轉ぶる如
 き卑怯者と思ふも愚なり汝が愚なる心より人も愚
 ならずと思ひるし馬まで贈りし宗盛が厚意を謝する
 戦場までまゝ再會の時死期せん今頼政の跡と慕
 ひ源氏の陣に馳加ふる疾や軍陣の血祭りみ我を要
 撃せんとなす疾々出よと二三度四五度大音拳て呼
 ぶれどこの膽勇は恐怖して誰一人出る者なく寂寞
 として音もあし競へ尚も呼るるやう斯まを敵と呼

と虽も出ぬへ平族後ましう思ふよ優たる臆病未練
 去を行んと大口開き武者声高く呵々とうち笑ひつ
 馬の頭と彼方へ向けう悠々と急ぎわやぞ只一騎
 園城寺と指て進む往く大膽不敵の面魂ひ競が容子
 を聞き敵め味方も評まろく全身總て膽あつても能
 まるるとい難るべいと歎賞せし由宜あるか案下休
 題園城寺より源三位頼政を始めとして以仁王と守
 護し奉り軍議を凝そその折あり渡部競が馳如く
 り前の始末と斯々と語る茲聞て源軍一同いと心地

よく思ひつ左もあそろんと笑坪に入り笑ひ動揺
 めくそが中よ仲綱大りよ喜ひく先の耻辱と雪がん
 此時ありとかの馬の鬚髪を截除き宗盛の二字後
 烙記しその夜密りみ士卒に命じて平氏の第に追入
 るたり馬を額と焦されて怒り狂ふを幸ひし鬚を志
 たくう撃しあとも倍々狂ひし狂ひし墓地倉に挿
 を飛越え忽ち腕に跳り入り他の馬もあまよ驚き
 送し蹄を磨ららし嘶き騒ぎを嚙合ふ程し何事やら
 んと平氏の人々東奔西馳叫びつ喚つその騒動一方



渡部 競ワタベノキマユ
膽勇宗盛イサヲウチノモリ
のく嘲弄ノクウラウ
せろろ

ろゞ宗盛且慙ち且悲り一う昔日仲綱は耻後與へ
 一其耻已の身と責てまゝ詮術ゆゑうりうを是に於
 て頼政の敵山南都の僧兵を徴し并に王の味方引
 入に其勢凡そ一萬餘人々々く軍威を張設け因に策
 と建て曰く時得かく失ひ易し今敵兵の驕る候
 幸ひ今夜精兵三千と遣ひ一火を三條烏丸に放ち
 平氏の兵を誘き出し且戦ひ且走らる敵を必らぞ逃
 ろれ追ふて勢を盡し追撃せん其間兵士數百と
 分ち敵の根拠と頼と一思ふ六波羅の空虚と窺ひ遠

りて急し襲ひ撃つて克と得んちと疑ひる一此議の
 如何ふと老練の軍議を挫く法師武者真海といへる
 者密に平氏に内通をなれを殊更に異議を發し論議
 一時を費やまら夏之夜短く明もりぬ清盛山徒
 と説勧め多くの財宝を贈りたりと一利を以て遂に誘
 ろんを變り易き人の人心亂離の世とて情るや叛服素
 ろる一なりぬ山徒のまごも王に救き皆平氏に従ひ
 て一時は敵となり一老切手練の頼政も防々術
 さんあくくし王と奉りて南都と指し頼む木陰は雨

洩りて落て行衛も定めなく暫く爰に笠宿り味方の
 疲労致休めんと平等院に入りたまふ従兵僅に三
 千餘騎去程に清盛の其子知盛と將として二万餘騎と
 率めて追至る死を決めたる源軍の令更何を猶豫
 せん末期の合戦花々しく屍を此所より曝せとも美名
 と千歳の下に垂ると小勢なれども怯まぬ去らむ
 宇治の流を前より取り橋を断て楯の板と雁行し併
 べたて矢襖はくろく防戦の準備を闘いなうりり至
 憊りし程に源平の両軍宇治の流を夾さみ對陣す

して其日も暮し翌る朝の曉霧に敵も味方も便り候
 得て打とむ大將頼政が平等院の太鼓の音色勇気と
 含んで川水よドンと響くや鯨波の声矢叫び太刀音
 凄まじくちや戦端を開きたり平氏の兵も勢ひ鋭く
 槁術と涉り来て此方の岸より入らんとまろく城に入ら
 と争ふ源氏の猛將仲綱兼綱を始めと一に渡部競
 等勇を揮ひ此所を先途と嚮詰り射詰り勢強き弦
 音の響きよ應けて倒る者幾百人の數とあはれ去
 とて衆寡の勢ひ敵を何の間より平軍の流れと

涉りて無二無三は息を吐せむ攻立らば刃の折は
矢種の盡き兼綱及び渡部競の乱軍のうらみ戦死
しとや是れと頼政の心静し以仁王を落しまわ
せ後安くるまきめんと其身のまとも還り戦ひ敵を
擇むよ手よ立者もあざれを乃ち院に入りて鎧と
釋き傾ての事座を占めつ従容として其従騎は向
ひ吾年既は古稀を過ぎ余命を貪り何せん天下の
為は義と唱へ運盡て元は歸り死さるも何を憾と
とせんと遺言の腹搔斬り宇治の螢火消るも歸ら

ぬ人の數は入りぬ享年爰は七十七仲綱等従兵十餘
人同ト枕は自刃して鬼藉に入りて痛ましくれ以仁
王へ途より追兵のため捕へらと敢なく首を刎
らして事漸やくは鎮まるそのころ清盛心安うは
都と摂津の福原は遷し宮殿未だ就らざる爰は帝
と弟頼盛の第は奉つて假の皇居と定めしが諸源の
我と因ると聞き遂は法皇と福原は幽閉し三間の板
屋と造りて爰は囚へ日よ二度の膳部を勧めその守
りも嚴重よて無状残酷の心をなまなく至尊と苦し

日本書紀 二編上 一

め奉つる報ひの程あそ恐ろしく人呼んで牢御所と云
爰より義朝の長子頼朝に僅うみ死一等と減下ら
れ伊豆の国へと流され北條時政が家より倚る時政
の平直方が赤齋より即ち頼朝が四世の祖八幡太
郎義家が母(頼義の妻)の直方が女より加之るる時
政の父祖の代より伊豆の豪族より累代源氏に属し
殊に義家の恩義を受し浅く宿縁斯の如くなる
れを平清盛の命より依り州人伊東祐親と流人頼朝と
監護より陽より酷く扱ふと陰より意欲属し等閑

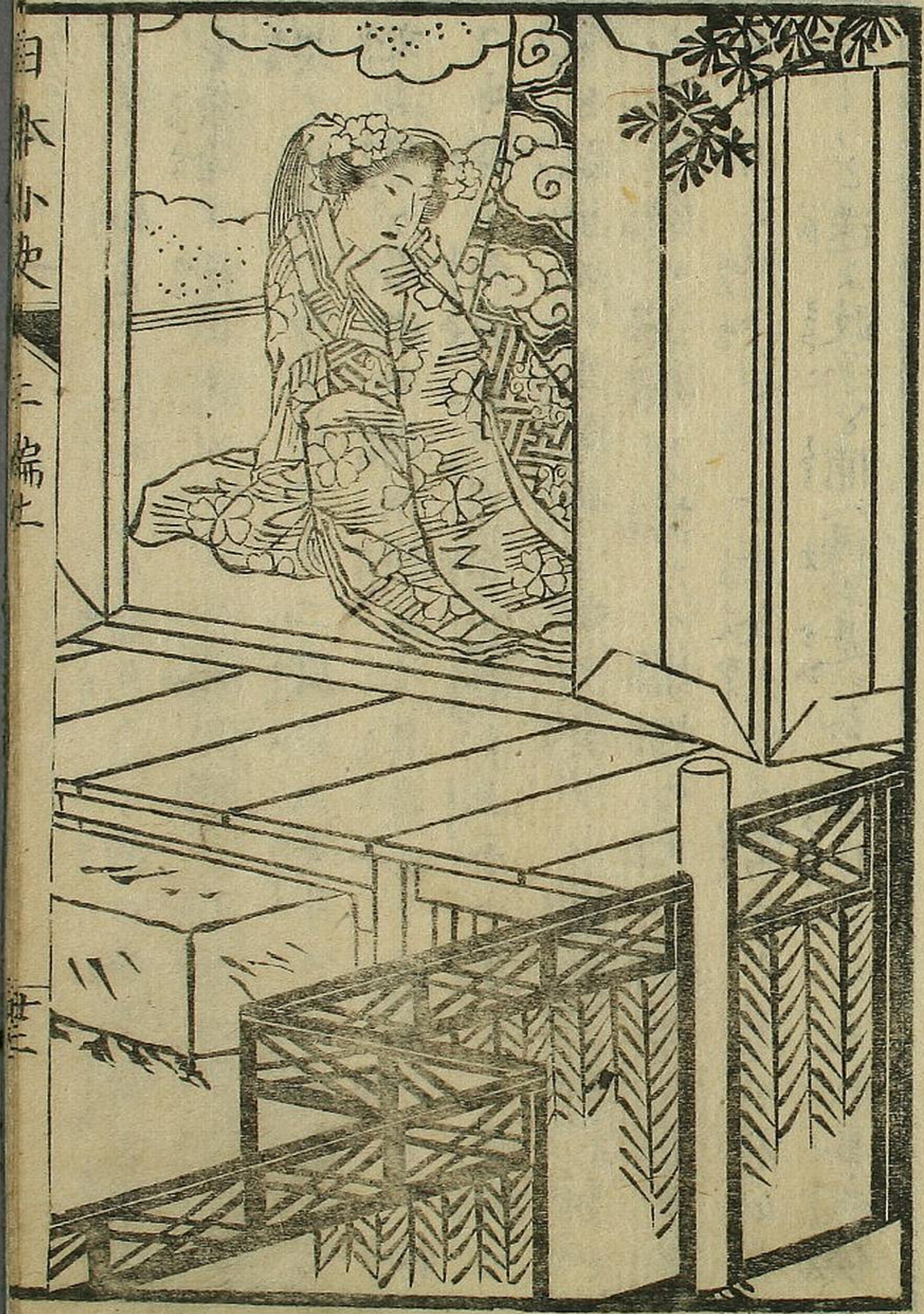
あつむ思ふのうその器の非凡なる哉見て未頼母
しく帰服せしとぞ初め頼朝伊東氏に許し寄食し英
雄色と好むの習ひのう祐親の女某氏に懸想し
遠くて近き男女の中垣超て逢夜の度重なり女子に
頼朝が情の胤を身より宿したる幸不幸父祐親あはれ
知り且怒り且驚き平氏の己を疑えんと恐る生木と
劈ぎた恩愛の羈を断ちる無残なり産む男兒を水
に投下女より嚴しく説諭を加へ江間小次郎といふ
者より嫁がせ己が嫌疑を防ぐりのう尚飽足らまや

江間と謀りて遂に頼朝を殺害して後の患いと除り
んとせし後此方へ疾くも窺ひ知り難と逃して安き
に就く北條氏が許し来り毒蛇の腮と逃し一に居る
あと未だ久しうぞ時政は二人の女子ありて以
前より懲て頼朝へそが次女は通せんと艶書を作りて
召使ふ心利たる腹心の安達藤九郎盛長とりける従
僕よかの認めたる艶書と齎らし情と通へを以て心傳
心盛長心よ思ふやう君が戀路の橋渡し首尾よく逢
しきありせんを難きよありぬ業をれど次女が容貌

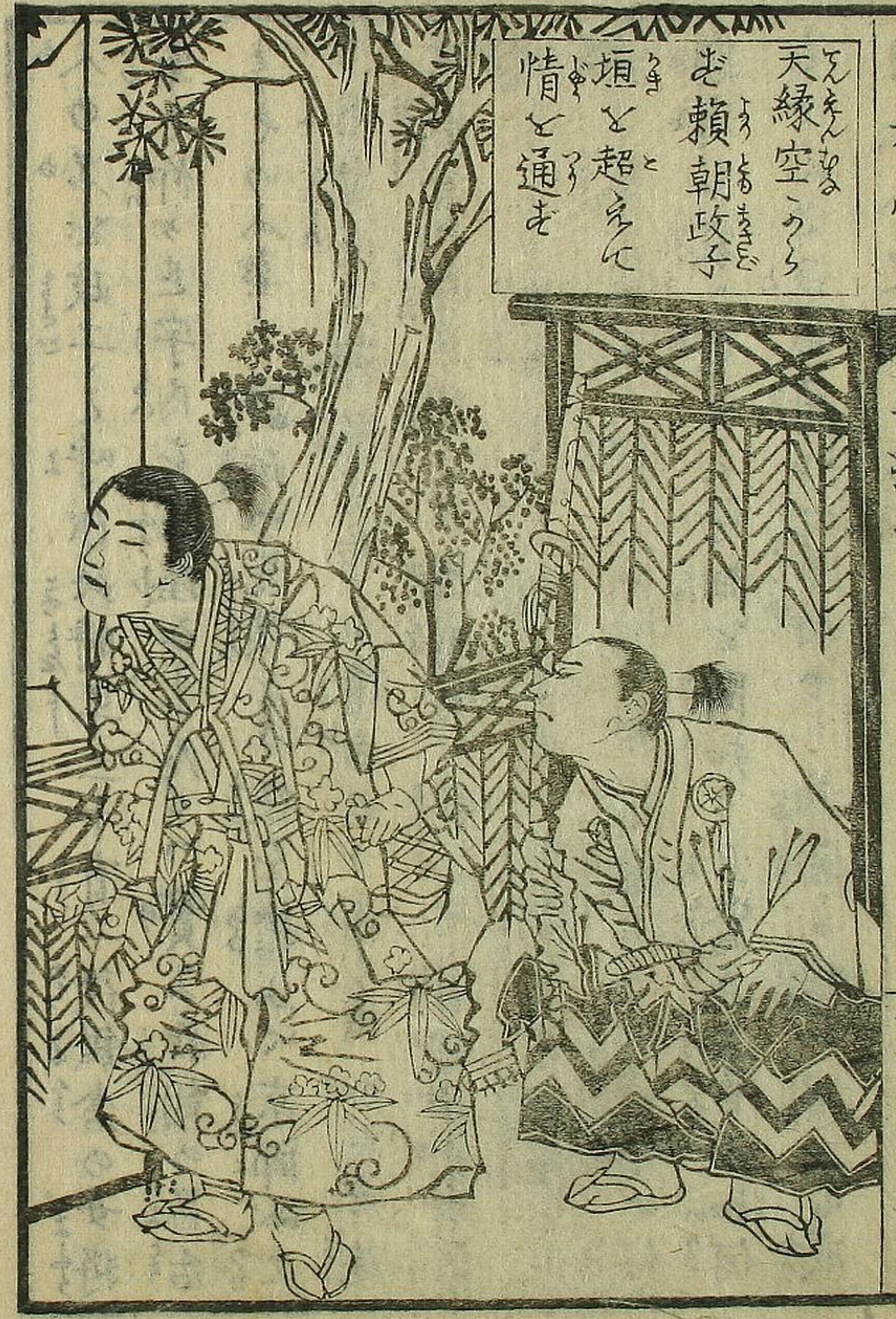
極めて醜し情好終始全うで我君彼も倦たまる浅
き女子の妬心より一そ禍害忽ち其処に起らんよ
く思ひおぼる後悔の臍と嚙ともなうまよみの甲斐多
事ごたうさんより別は艶書と認め長女が許し送る
べし嗚呼爾ありと胸に問ひ腹よ答へる打點頭き思
按ゆ道中引違へ元来一道へ後戻り己が部屋を歸
りゆく話頭兩端その前夜次女が夢に一羽の白鳩金
の函と啄と来り吾が枕辺に置き思へを覺て跡を
き南柯の一夢まじく消残る閨の燈火未明ちうく告げ

渡るハ般の雞と諸共疾起出て姉は向ひ心は掛る
昨夕の夢見箇様々々と物語ると聞け姉は打微笑と
そいふに夢よてつるものよ左程其許が氣は掛るな
ら妻が其夢買取るよと何やら心嬉しき夢を
買たる徴の代と鏡と妹と興へは是なん良縁奇遇
の前表中と媒つ盛長が偽の艶書と齎らして密に長
女は興へて妹が夢よ思ひ合せる伶俐も喜ぶ心の
うち遂に頼朝と密通ひ比翼連理の契りさへ深き情
の有磯海巫山の雲楚臺の兩情好日々は微密あり婦

人の名を政子と呼び此時年二十有一後鎌倉の女將
軍と仰が是宇内を掌握するたるは實に我朝の呂后
とものみ登一時政の先頃より役を擔ふて京師の上
り吾愛女が頼朝とかくる情由あるを知らぬ況
て政子の幼き時より清盛の一族よて當時伊豆の目
代としき威名を高く低くぬ八牧判官平兼隆なる
者よ妻をたせんと破るよかた結縁あり時政頃て任
期満ち家よ帰りて仔細を聞知り且驚き且喜び如何
とせんといつ角つ一旦約せし兼隆よ背く譯ふも成



日本書紀
二卷



天縁空てんえんくう
 頼朝政子よりともまさこ
 垣と超かきとこ
 情と通なさけととほ

日本書紀
二卷

七

ざく知れども知らぬ面色にて約の如く長女政子
を兼隆が許し嫁がせたり親み背く不孝の罪科を
思ふぬまの何れも二庭踏ぬ女子の節操教名の
文も背りんやと思ひ決めて其夜さう折ゆ折とて恰
うも好し雨風烈しと音も紛れ政子の辛くも兼隆の
家を脱出せ一生懸命二世と契り頼朝と手み手を
とりて戀の山昇り詰たる煩惱の犬も逐して走り
伊豆山も潜伏せしを兼隆大りの驚きと所々方々と
搜しうと遂に政子を捕へ得ば是非も其後手と束ね事總便

よ岩も重なり是より時政の以前も彌増も厚く頼朝
と待遇もあまを頼朝ゆきと時政と深く信じて疑い
を迭ふその意衷を明し尺蠖の屈むに伸んがたあ蛟
龍もたび雲を得ば終に池中の物も何れも時機来れ
よと待をりり世運爰も循環してかの以仁王の令
旨早くも頼朝が許し達し諸国の源氏を徴さるる
世の風評大方なりと事と拳るに此時ありと密々
時政とその謀慮を定め現兵僅に八十騎不意に起り
て目代たるかの判官兼隆が八牧の館に押寄ると

日本書紀 二編二 三十一

一戦ニ兼隆を撃取り伊豆一州と畧取り之勢ハ漸ク
熾ンナリ是ニ於テ頼朝ハ安達盛長と説客とあり高
倉宮の令旨を傳へ関東八州の豪傑と歴説せしむ盛
長先づ大庭景親ガ許ニ至リ獲張と欺ク懸河の辨舌
詞と盡して説しうと景親へ平氏の武士恩義と擔ふ
も軽りしむとて従ふ氣色ありざる哉兄景能ハ意と
決し弟ニ向つて曰へるやう汝も恩義の爲にせよ吾
ハ義と見て勇むるに左をれを恩と背くあはく義
と欠く諂りもなうるべしと兄弟互ひニ敵味方直と

来りて頼朝ニ歸せ盛長次は首藤経俊ニ到り説ま
乃ち前の如し経俊嘲り笑つて曰く頼朝流人の分際
として平氏と撃んとするは鼠ガ猫と睨ふは奇
しと嘗て其義と承引を去て三浦義明ニ抵る義明使
者の至ると聞き病ひ紙押して一族と集り吾家累世源
氏ニ仕へ今ハの盛拳ニ遭ふと得て喜び何ぞある
過ん吾年已ハ九十と超え老耗ひて用と為さむ汝等
よく勉めようし事成らば家と興さん事破るなば義
の爲に死するも武門の習慣にして何を惜み何と

う歎うん疾々出陣の準備とせよと盛長と厚く待遇
し帰服の旨と演説をまみぞ是より盛長の千葉常胤
及び平廣常が許し抵り説て味方は引入まつ總勢凡
そ三百騎進んで石橋山に軍を實は治承四年八月二
十三日なり翌とべ二十四日の未明木魂は響く鯨波
の声朝嵐は吹るびく旗は勝負の色見え砂烟と蹴
立て押寄来るその勢およそ三千餘騎あり則ち別隊
ありて大庭景親首藤経俊二隊に分とて大将たり多
寡の知きたる烏合の乱賊何程の事のゆるべきやと

敵と侮る驕將怠卒たぐ下當は蹴散しとるん兵卒
進めと大将景親弟景尚と相併び自り先鋒は兵と進
り頻りふ戦ひと挑つ既は間近く攻寄せつ敵は
大軍味方へ小勢衆寡敵せぬ大事の戦ひ初めより一
て敗れぬを英氣挫けり再興の気力を落さば如何に
せんと頼朝深く心と苦しめ三浦義明が弟岡崎義實
と召しと此敵を防がん者誰に命とて然るべき意見
如何ふと大将が問は答へり義實はさん候らみ寄手
の大将たる景尚を軍慮は長け侮らるがとき敵より

て今よの景尚よ當らん者某が愚息佐奈田與一義忠
の外ゆるべらるる昔時晋の祁黄羊がその子の午と言
ひし者我平公ふ薦めたる賢よ倣ふよ似て斯く申さ
を嗚呼たられど子と見る事親よ如き義忠へ武藝勇
敢も義實が類よゆらむ彼が敵よ堪た者ありと
薦むる詞よ點頭頼朝直よ義忠を召しよ防禦の任を
命ぜらる拔擢されよ義忠へ雀躍みよつ勇と立ち已
が陣よ立帰り郎黨家安よ向ひ借りよやう我防戦の
大任よ蒙り翌日戦ひの場よ臨生を生て再び帰る生

ト是決して身我軽ん血氣の勇よ迅るよゆらむ身
と犠牲よ防がごん君の大事よ及ぶよ必定左きれを
飽まて殿戦して敵將景尚の首と得る將吾頭と彼
よ渡まら雌雄と一拳よ決せむば衆人のうちより拔
擢されよ此大任よ蒙りよその甲斐絶てゆらざるの
と父祖の耻辱君の瑕瑾君父の為よ捨る命今夜限
りの名残あり汝へその身と全ふよ故郷へ帰りて是
等のあつて家族よ傳へ呉よと覚悟ゆきよた
勇士の一言生別死別よ酬となる水杯よ下よあつた家

安何やすあとら言い出でる次つぎの卷まきと讀よみ知しるべし

通 日本小史二編卷之上終

010190512857

